

# 東入部遺跡 5

—第13次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1461集

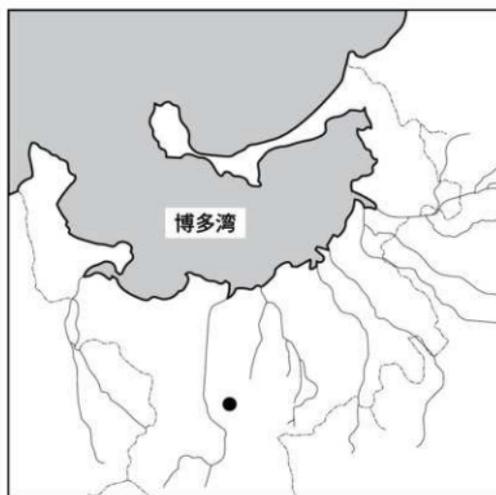
2022

福岡市教育委員会



# 東入部遺跡 5

—第13次調査報告—



遺跡略号：HGI-13

調査番号：2002

2022

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、宅地造成に伴う東入部第13次発掘調査について報告するものです。この調査では古代の掘立柱建物を検出するとともに、須恵器や土師器などが出土しました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、有限会社愛住宅をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会  
教育長 星子 明夫

## 例言

1. 本書は福岡市教育委員会が早良区東入部2丁目の宅地造成に伴い、令和2(2020)年4月13日から5月20日に発掘調査をした東入部第13次調査の報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は荒巻宏行・三浦萌が行った。
3. 遺物の実測は三浦・久富美智子が行った。
4. 遺物の写真撮影は三浦が行った。
5. 製図は三浦が行った。
6. 本書に掲載した方位はすべて磁北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系である。
8. 本書に使用した遺構略号はSB＝掘立柱建物、SC＝堅穴住居、SP＝柱穴(ビット)、SK＝土坑である。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は三浦が行った。

遺跡名	東入部遺跡	調査回数	13次	調査略号	HGI-13
調査番号	2002	分布地図図幅名	85 入部	遺跡登録番号	0343
申請地面積	1179.08㎡	調査対象面積	226.99㎡	調査面積	121.1㎡
調査期間	令和2年4月13日～令和2年5月20日			事前審査番号	2019-2-67
調査地	福岡市早良区東入部2丁目346番2				

## 本文目次

I. はじめに	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の組織	3
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 基本層序	7
3. 遺構と遺物	10
1) 竪穴住居址	10
2) 掘立柱建物	10
3) その他	10
IV. まとめ	13

## 挿図目次

図1. 周辺遺跡分布図 (1/10000)	5
図2. 過去の調査区位置図 (1/5000)	6
図3. 調査区位置図 (1/500)	7
図4. 遺構配置図 (1/120)	8
図5. 調査区土層図 (1/80、1/40)	9
図6. SC030 実測図 (1/20)	11
図7. SC030 北壁土層実測図 (1/20)	11
図8. SC030 出土遺物実測図 (1/3)	11
図9. SB074 実測図 (1/40)	12
図10. その他出土遺物 (1/3)	13

## 図版目次

図版1	1. 調査区Ⅰ区全景 (西から)	2. 調査区Ⅰ区全景 (北から)
図版2	1. 調査区Ⅰ区全景 (東から)	
図版3	1. 調査区Ⅱ区全景 (東から)	
図版4	1. SB074 (東から)	2. SC030 (東から)

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成31(2019)年4月16日付けで、福岡市早良区東入部二丁目346番2(敷地面積:1179.08㎡)における宅地造成に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、有限会社愛住宅より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号:2019-2-67)。

これを受けて経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である東入部遺跡に含まれていることから、別の申請に伴って行われた平成29(2017)年4月12日における工区内の一部において実施された確認調査をふまえ、その結果、現地表下130～140cmにおいて遺構が確認されていることが判明したため、申請者と協議を重ねた結果、位置指定道路にあたる部分の発掘調査を実施することとなった。

本調査は令和2(2020)年4月13日～令和2(2020)年5月20日まで行い、報告書作成の整理作業は令和3(2021)年度に行った。

## 2. 調査の組織

調査委託：有限会社 愛住宅

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：令和2年度)

調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波正人
	同課調査第2係長	藏富士寛
庶務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係	三浦悠葵
調査担当：	埋蔵文化財課調査第2係文化財主事	三浦 萌

(整理・報告：令和3年度)

整理・報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長	菅波正人
	同課調査第2係長	藏富士寛
整理・報告庶務：	文化財活用課管理調整係	井手瑞江
		内藤 愛
整理・報告担当：	埋蔵文化財課調査第2係文化財主事	三浦 萌

## II. 遺跡の立地と環境

交界灘と背振・三郡山系に挟まれた福岡市には、糟屋、福岡、早良、今宿の4つの平野が広がっている。今回報告する東入部遺跡は、そのうちの一つである早良平野の南東部にある荒平山西麓部に近い貞島川と空見川に挟まれる沖積地上に位置する。当調査区は荒平山の西麓に位置しており、平成29(2017)年に追加包蔵地指定を受けた範囲に位置し、東入部遺跡の中では東端にある。調査区東側の荒平山では荒平古墳群E支群の発掘調査が行われている。

付近に位置する遺跡と合わせて述べると、本遺跡では晩期終末の墓地が発見されており、遺構にはともなっていないものの、遺物も確認されている。本遺跡の北に所在する重留遺跡では、縄文時代晩期の竪穴住居址や墓地が発見されている。弥生時代になると本遺跡と重留遺跡に加えて岩本遺跡、四箇船石遺跡でも竪穴住居や墓地といった遺構が確認されるようになる。本遺跡では特に第2次調査8区において、前期後半から後期初頭にわたって、青銅器、鉄器等の副葬品を有する木棺墓や甕棺墓といった墓地群が形成されている。またこれらの墓地群の近くには竪穴式住居群も発見されており、弥生時代における拠点集落であると考えられる。後期初頭からそれらの集落は一部断絶するが、古墳時代になると再び集落が形成されるようになる。本遺跡内においても第2次調査などで円墳が発見されており、他には滑石製の玉造。また重留遺跡の範囲内において全長約75mの前方後円墳である拝塚古墳が築造されており、この地域の首長の墓であると考えられている。また同遺跡では前期の方形周溝墓も発見されている。また本遺跡の東に位置する荒平山には荒平古墳群が築造されている。古代に入ると本遺跡では第4次調査において、官衙的な特色をもつ大型の掘立柱建物や製鉄関連遺構とともに発見されている。また他の調査区や周辺遺跡からも古代から中世の鍛冶関連遺構が発見されている。中世の本遺跡は主として第5・7・8・11次調査において遺構が確認されており、村落が営まれていたことが判明している。

### 【参考文献】

- 【入部Ⅰ】1990 福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集
- 【入部Ⅱ】1999 福岡市埋蔵文化財調査報告書第631集
- 【入部Ⅲ】2000 福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集
- 【入部Ⅳ】2001 福岡市埋蔵文化財調査報告書第685集
- 【入部Ⅴ】2012 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1140集
- 【入部Ⅵ】2012 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1141集
- 【東入部遺跡群1】1994 福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集
- 【東入部遺跡群2】1994 福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集
- 【東入部遺跡群3】1994 福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集
- 【東入部遺跡群4】1995 福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集

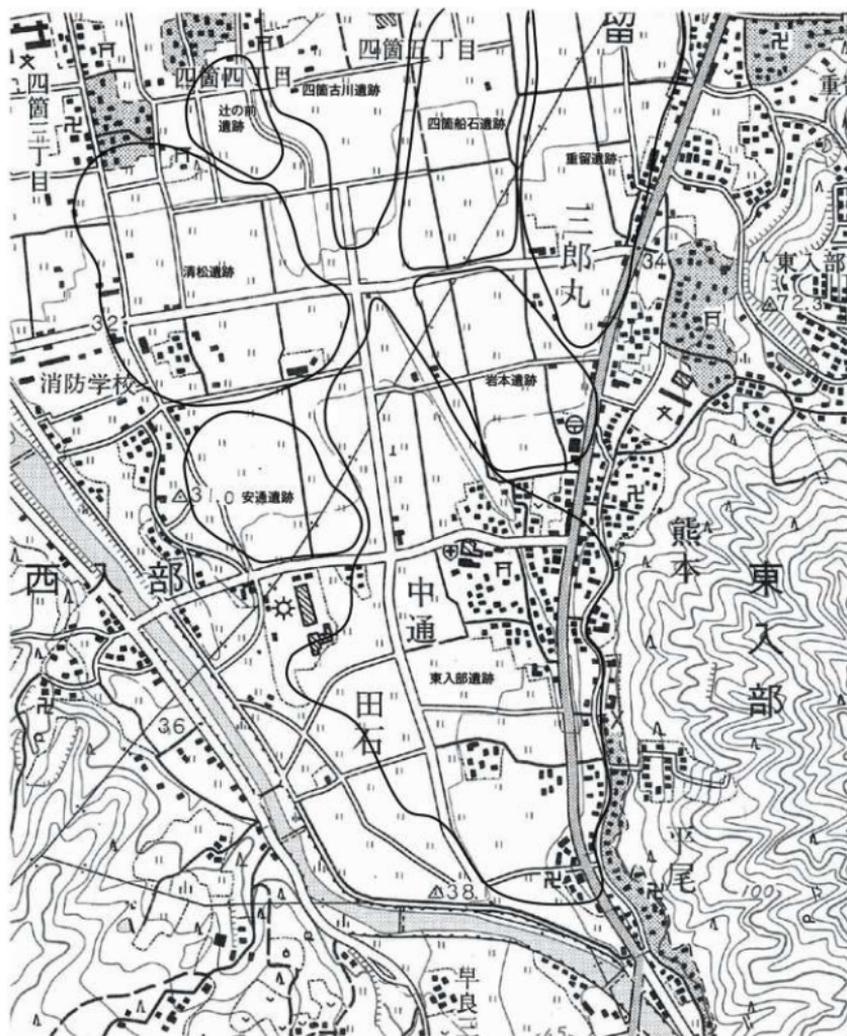


图1. 周边遺跡分布图 (1/10000)



図2. 過去の調査区位置図 (1/5000)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

今回報告する東入部遺跡第13次調査区は、早良区東入部2丁目346番2に所在している。東入部遺跡の東端部に位置しており、北部で第8・9次調査が行われている。

発掘調査は、引き込み道路の部分226.99mを対象とした。廃土処理の関係上、調査区を2分割し西側半分の調査から行い、その後東側半分の調査を行っている。地表面から約120cmで遺構面が確認され、この上面までの表土の掘取りを行った後、人力で遺構の検出及び掘削、遺構実測、写真撮影を行った。発掘調査は令和2年4月13日に開始し、同年5月20日に終了している。

本調査区で検出された遺構は古墳時代の竪穴住居址1軒、おそらく中世と思われる掘立柱建物が1棟、柱穴（ピット）多数である。出土遺物は少ない。

#### 2. 基本層序（図5）

現地表面の高さは約37.95cmである。遺構検出面は調査区南西端部で約140cm掘り下げた標高約36.5mの高さである。調査区の西から東へ向かって緩やかに高くなっていく地形をとる。

I区の南壁土層では現地表面から約70cmの表土・客土が堆積している。その下10～20cm程堆積している1層は灰色砂質土であり粗砂をわずかに含んでいる。2層と3層は包含層である。2層は粗砂を多く含む灰褐色砂質土である。3層は粗砂を含まない褐色砂質土であり、砂粒が細かい。

II区の南壁土層では40～70cm程の客土が堆積している。西よりあるB-B'の1層・2層は、それぞれI区南壁土層における1層・2層と同一であると思われる。3層は黒色粗砂層であり、地山ブロックを含む箇所が存在する。A-A'では水田土壌と思われる1層が確認されている。

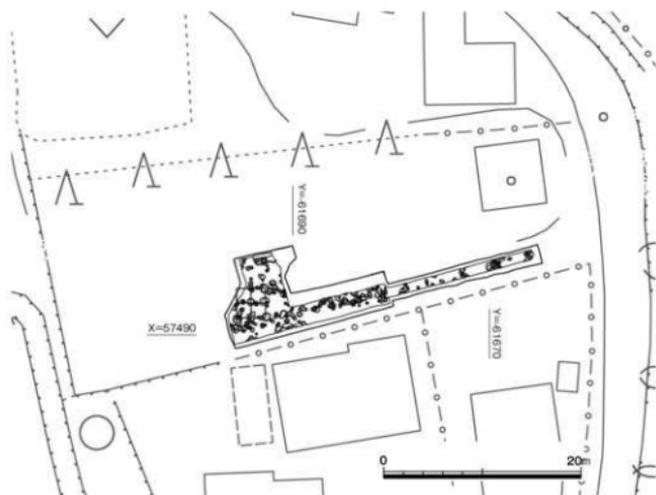


図3. 調査区位置図 (1/500)

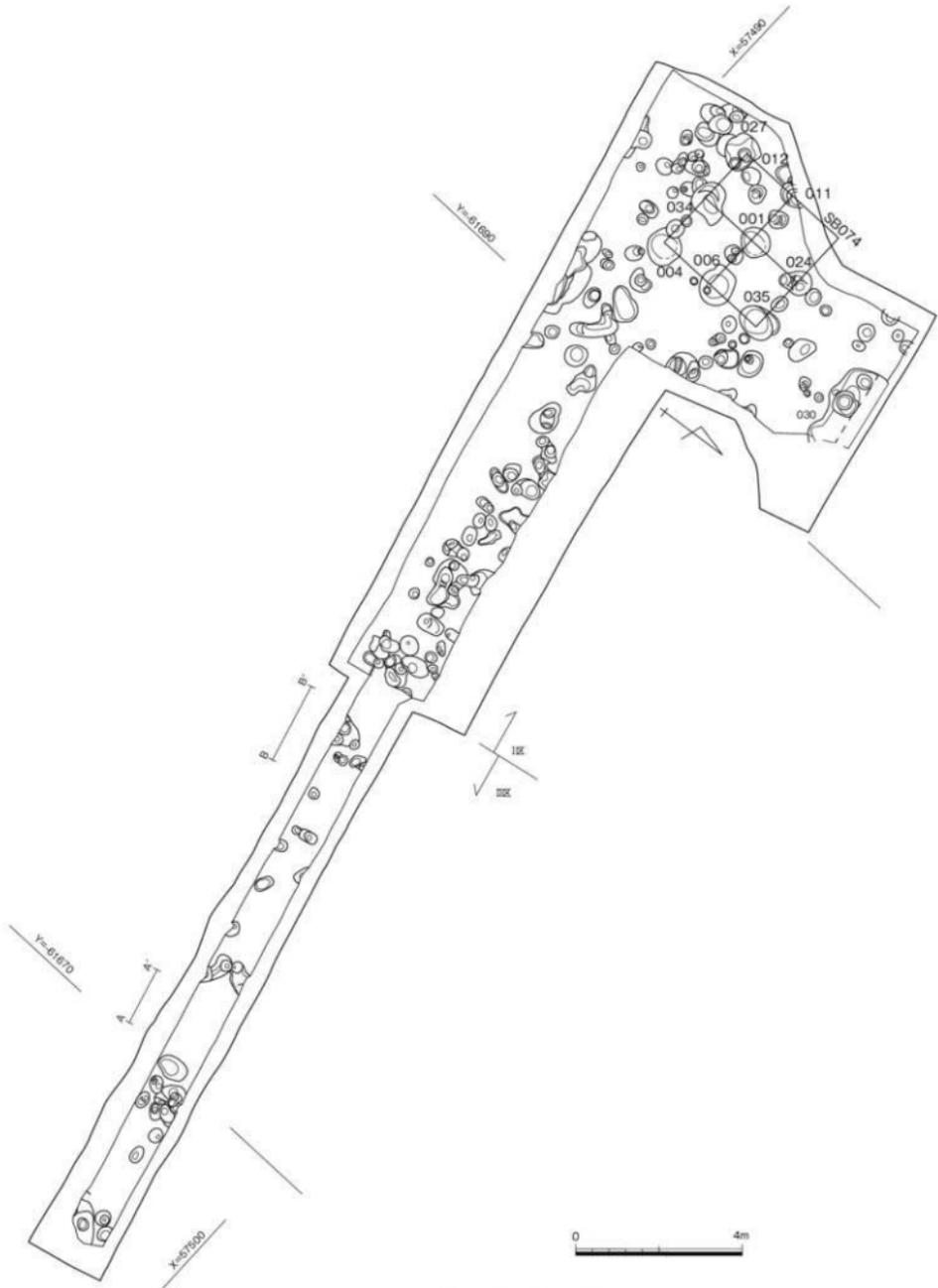
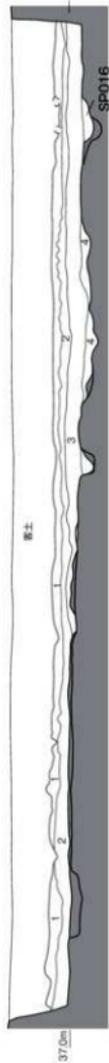


図4. 遺構配置図 (1/120)

I区南壁土層図 (1/80)



- 1 灰色砂質土：礫砂をわずかに含む
- 2 灰褐色砂質土：礫砂を多く含む、上面が堆積がみかっている（腐植土のみ）、底が層
- 3 褐色砂質土：礫砂を含まず、砂子細か、底が層



II区南壁土層図 (1/40)



- 1 黄灰色質土（赤土上層）
- 2 灰色砂質土（赤土中層）
- 3 灰色砂質土（赤土下層）
- 4 緑灰色シルト—礫砂
- 5 灰色シルト—礫砂
- 6 灰色シルト—礫砂
- 7 赤褐色（腐植土）腐植層
- 8 灰色細砂—砂質土
- 9 黄灰色土—シルト、黒灰色砂土

- 1 灰色砂質土
- 2 灰褐色砂質土：礫砂を多く含む
- 3 褐色砂質土：礫砂を含まず、腐山アロソキを含む



### 3. 遺構と遺物

#### 1) 竪穴住居址

##### SC-030 (図6・7)

調査区の西側の北端において発見された竪穴住居址の一部とみられる遺構である。残存長1.9m×1.06m、深さ約0.36m。出土遺物から古墳時代の遺構であったと考えられる。カマドは発見されなかったものの、南端中央付近の埋土が焼土や白色粘土ブロックが混ざっていたことから、カマドの残骸が残されていたものと考えられる。

##### 出土遺物 (図8)

1は須恵器の蓋である。口径10.0cm、高さ2.8cm。外面の側面と内面は回転ヨコナデ、天井部は回転ヘラケズリが施されている。2は瓶の把手部分である。把手部分の径は長軸4.6cm、短軸3.2cmの隅丸台形をとる。内面はケズリ、把手部分はナデ調整である。3は土師器の甕もしくは壺の底部付近の破片である、外面はタテハケ、内面はケズリが施されている。外面は黒色を呈す。

#### 2) 掘立柱建物

調査区の西側にて2間×2間の総柱になる掘立柱建物が発見された。

##### SB-074 (図9)

調査区のほぼ中央部にて発見されたSP-001、004、006、011、024、027、034、035から構成される2間×2間になると考えられる総柱建物である。南北にわずかに長く、桁行全長3m。柱間は西から1.48m、1.48m、1.48m、1.48m、1.52m。梁行全長2.92m。柱間は北から1.44m、1.44m、1.44m、1.48m、1.44mである。柱穴の深さは約60cm前後のものが多く、主軸方位はN-7°-Eをとる。

柱穴から数点の土器片が出土しているものの、図示できるものはなかった。しかしSP-011にきられているSP-012から底面糸切調整の土師器坏が出土していることから、中世以降に建てられたものである可能性が高い。

#### 3) その他 (図10)

4はSP-055で発見された太型蛤刃石斧である。長さ7.7cm、幅8.1cm、厚さ2.4cm。砂岩系か？5はSP-012で発見された土師器の皿である。口径14.6cm、器高2.7cm、底径9.2cm。外面には回転ヨコナデが施されており、底部は糸切調整である。

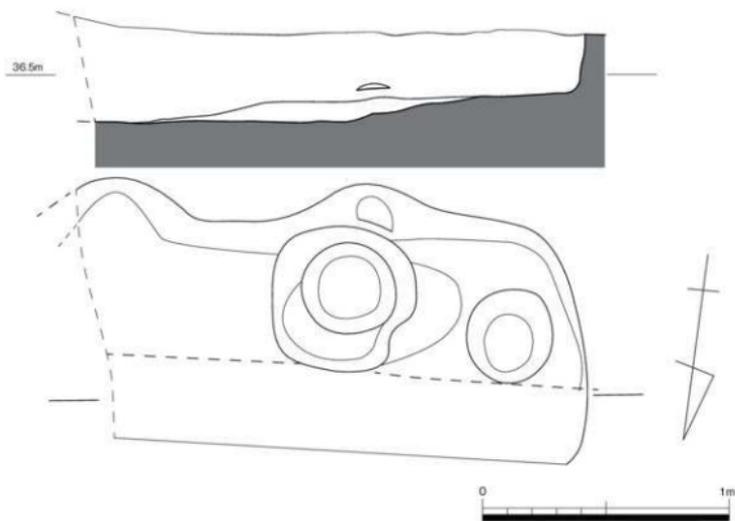
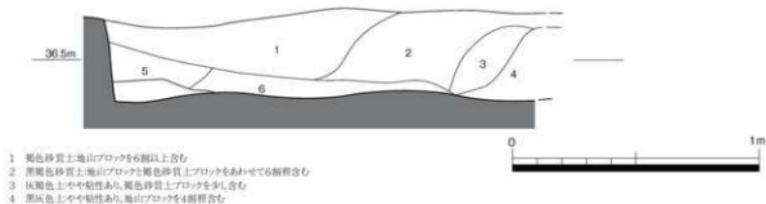


図6. SC030 実測図 (1/20)



- 1 褐色砂質土・地山ブロックを6割以上含む
- 2 赤褐色砂質土・地山ブロックと褐色砂質土ブロックをあわせて6割程度含む
- 3 灰褐色土やや粘性あり、褐色砂質土ブロックを少し含む
- 4 黒灰色土やや粘性あり、地山ブロックを4割程度含む

図7. SC030 北壁土層実測図 (1/20)

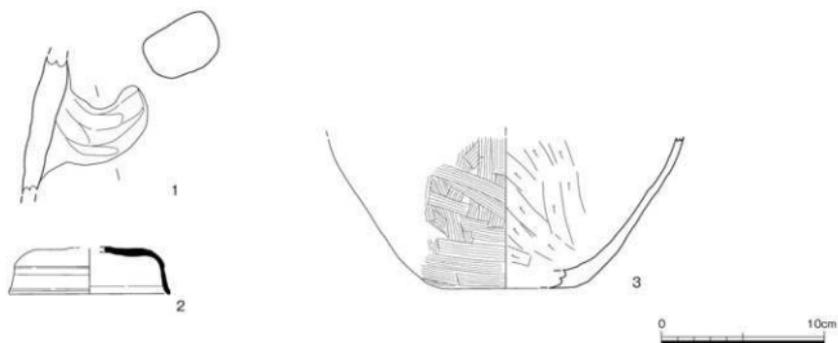


図8. SC030 出土遺物実測図 (1/3)

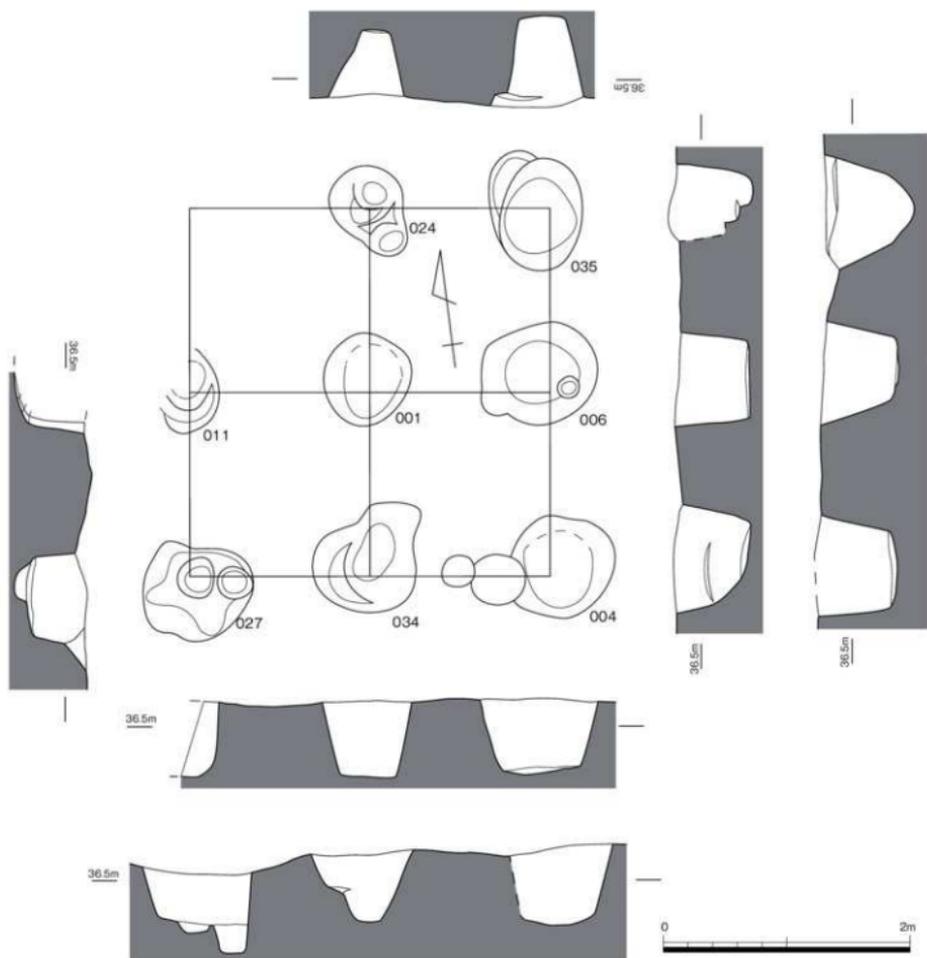


图9. SB074 实测图 (1/40)



図 10. その他出土遺物 (1/3)

#### IV. まとめ

今回発見された遺構は古墳時代の堅穴住居址一軒と中世と思われる掘立柱建物一棟とその他ピットが複数である。中世の遺構としては周辺の調査では第5次調査において土坑、掘立柱建物、製鉄関連遺構が、第8次調査において掘立柱建物と埋没河川が、第9次調査において埋没河川が確認されている。このうち第5次調査の掘立柱建物は出土遺物から14世紀、第8次調査の掘立柱建物は12世紀中頃のものと考えられている。今回発見された掘立柱建物(SB074)も中世のものである可能性が高く、当該期の村落を形成していたものと考えられる。

図版 1



1. 調査区1区全景 (西から)



2. 調査区1区全景 (北から)

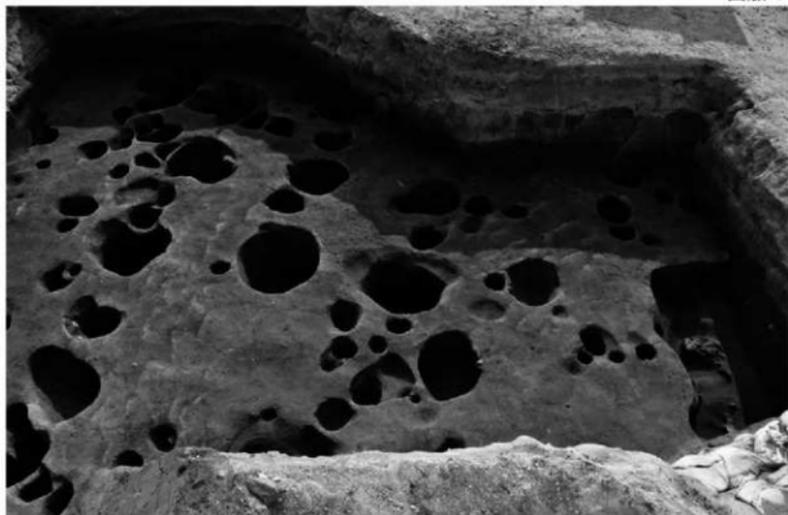


1. 調査区I区全景（東から）

図版3



1. 調査区Ⅱ区全景（東から）



1. SB074 (東から)



2. SC030 (東から)

# 報告書抄録

ふりがな	ひがしいるべいせき5							
書名	東入部遺跡5							
副書名	—第13次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1461集							
編著者名	三浦 萌							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
東入部遺跡	福岡県福岡市 早良区東入部 2丁目346番2	40137	0343	33° 31' 00.02"	130° 20' 09.77"	20200413 ～ 20200520	121.1mf	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東入部遺跡	集落	古墳、中世	掘立柱建物、土坑、 竪穴住居、柱穴	須恵器、土師器				
要 約	<p>東入部遺跡は早良平野の南東部、荒平山の西麓部に位置する縄文から中世にわたる複合遺跡である。これまでの調査で縄文時代晩期の竪穴住居址、弥生時代の甕棺墓や大型掘立柱建物などといった集落拠点、古墳時代の竪穴住居遺構や集落、中世の村落などが確認されている。今回行った第13次調査は新たに遺跡包蔵地に追加指定された土地であり、遺跡の中では東端にあたる。</p> <p>今回確認された主な遺構は古墳時代の竪穴住居址と中世のものと思われる2間×2間の総柱になる掘立柱建物である。周辺の調査においても中世の村落が確認されていることから、同じ村落内の建物であると思われる。</p>							

## 東入部遺跡5

—第13次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1461集

2022年3月24日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1

印 刷 株式会社 博巧印刷  
福岡市南区那の川一丁目9番7号